第９章　菩提心を摂受する（167 ページ 5 行目～169 ページ 31 行目　）

2020/09/10　M.Seino

おさらい

規範師シャーンティデーヴァの流儀により菩提心を受ける儀軌

1）加行の儀軌

2）本行の儀軌

3）後の儀軌

加行の儀軌

1）供養を捧げること

2）罪を懺悔すること

懺悔の仕方

① **能破の現行（の力）←今日はここです。**

② 対治の現行（の力）

③ 罪過の遮止の力

④ 依処の力

3）善に随喜すること

4）法輪を転ずるよう勧請すること

5）涅槃しないよう祈願すること

6）善根を廻向すること

〇参考資料：『ダライ・ラマ瞑想入門』ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ著ゲシュー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ監修　春秋社　P71

次の七支分の三番目にあたる懺悔の行をするときは、**後悔の気持ちを持つことがとても重要です。**後悔の気持ちがなければ、悪業を浄化することはできません。正しい浄化の行には、「後悔の力」「よりどころ（帰依の対象である三宝）の力」「（一切の悪行を正す）対治の力」「二度とその行為をしないという決心の力」の四つの力が必要となりますが、根源的な力である「後悔の力」があれば、他の力はそれにつづいて自然に生じます。

能破（の現行）の力

そのうち能破の現行の力は、前に造った罪悪について激しい後悔が生じて、対境の面前において告白し懺悔するのです。

能破（英訳 remorse）：因明（因は理由、明は学の意。仏教の論理学）で、相手の主張に対し、誤謬を指摘して反駁することをさす。（仏教用語大辞典）
：remorse〔罪悪などに対する〕激しい後悔

〇参考資料：ドルズィン・リンポチェ『阿弥陀佛とポワ４日目 3』ご法話より「能破の力」の説明部分。温子先生が通訳してくださった日本語を文字起こししました。
「四力（しりき）の一番目が、後悔する力です。前世に自分がどれくらい罪を積んだのかはわからないのですけど、今生でどれくらい罪を積んだかはわかるわけです。たとえば、嘘をどれくらいついたか、泥棒をどれくらいしたか、邪淫をどれくらいしたかとか、不善をどれくらいしたか、嫉妬をどれくらいしたか、怒った、をどれくらいしたか、その心を観察してみると、それがわかる。
ですので、まずは自分の罪というものをわかることです。
罪というもの、自分がすごい間違いをしているんだということがわかることがまず必要です。自分が大きな間違いをしているということがわからないと、それを捨てることができません。
そういう罪を積むと、悪事に生じるということがわかれば、罪を断じていこうと思って、罪を積んだことを後悔できるわけです。たとえば、毒を飲んだあとに、『あなた毒を飲んで死ぬよ』と言われたら、怖れて、そんなもの飲まない。そのように罪を心にどういうものかわかって、それに対して怖れを起こす。怖れが、恐怖心がないと、罪が本当にたいへんなものだとわからずに、それを捨てることができない。
みなさんは、自分は大きな罪を積んでいないと思うかもしれません。それはそれでよいことだと思う。でも、小さい罪は積んでいるわけです。小さい罪は非常に数がたくさんですので、結局、大きな罪になります。自分の積んでいる罪を小さいと考えず、すべてが大きな罪を積んでいると理解します。そういう罪がぜんぶ悪趣におちる原因となると考えて、それを後悔して懺悔していきます。」

後悔の生じ方
それもまた、どのように後悔すべきかというと、後悔の生じ方は三種類です——
1）　無益であると観察して後悔が生じたことと、
2）　怖ろしいと観察して後悔が生じたことと、
3）　速く離れることが必要であると観察して後悔が生じたことです。

1）無益であると観察して後悔が生じたことと、

by investigating the meaninglessness of nonvirtue

試訳：不善が無益であると観察することにより（後悔が生じる）

2）怖ろしいと観察して後悔が生じたことと、

by investigating fear of its result,

試訳：罪を積んだ果が、怖ろしいと観察することによって（後悔が生じる）

3）速く離れることが必要であると観察して後悔が生じたことと、

by investigating the need to be free from it quickly

試訳：（罪を浄めていない間に私は死ぬ疑いがあるので、）一刻も速く浄化することが必要だと観察することによって（後悔が生じる）

この 3 つについて、以下、それぞれ詳しく述べられています。

無益であると観察して後悔が生ずること

そのうち、第一〔：無益であると観察して後悔が生じたこと〕は、

私が造った罪悪それもまた、或るときは敵を征伐するために造った。或るときは友を護るために造った。或るときは身体が住するために造った。或るときは物を蓄えるために造った。私は死んでから後世に引っ越すとき、敵と友と国と身体と財物は私に伴わず、悪業の罪障が私に伴って、どこかで生まれたところに処刑者として立つのです。

そのようにまた『勇施長者所問経』(訳註 45) に「父母、兄弟姉妹と子どもと妻と、下僕と財宝と親族の集まりもまた、死んだ者に付き従ってそれらが行くことはない。諸々の業が付き従って、それらが行く」、そして「きわめて苦しくなったそのときに、子どもと妻は帰依（処）にならない。私ただ一人が苦を経験すると認める。彼らはそのとき私の取り分を受け取らない。」と説かれています。『入行論』(訳註 46) にもまた「すべてを捨てて逝くことが必定なのに、私はそのように知らなくて、愛する者と愛さない者のために、様々な罪悪を造りました。」、「愛する者たちもまた無くなる。愛さない者たちもまた無くなる。私もまた無くなる。同じく〔業果以外、〕すべてもまた無くなる。」と説かれています。

よって、罪悪は敵・友の二人と、身体・〔受用すべき〕資材の二つ、その〔合計〕四つのために造ったが、その四つと私は永らく連れ添うことはないから、罪悪こそは難が大きく益が小さいと思惟して、激しい後悔を生じさせるのです。

敵・友、身体・財物のために、私は罪をさまざま造ったが、
短い命が終わると、業の果以外、すべて無くなる。
罪悪こそ、難が大きく、益がない。

罪障：往生や成仏などの善果を得るさまたげとなる悪い行為。罪業。（仏教語大辞典）

〇参考資料：　ガルチェン・リンポチェ法話集２（P6～7）
悪業を浄化するために大切なことがふたつあります。ひとつは後悔すること、もうひとつは悪行を繰り返さないと誓うことです。そもそも誰が悪行を為したのかというと、無始爾来の自分自身の煩悩が為したのです。輪廻の一切の苦を作ったその煩悩は、今まだここにあります。煩悩は一切の苦の基でありますから、これから先もさらに多くの苦を作り続けます。私たちは、たとえば怒りや憎しみや嫉妬の感情に流されて、身体と言葉で悪行を犯し続けています。ですからはじめに、過去に行った罪を思い起こしてその過ちに気づかなければなりません。過ちに気が付けば、それを懺悔して止めることができます。

もし、益は無いが、それが私を害することにはならない、と思うなら、
怖ろしいと観察して後悔が生ずること
第二の義〔：怖ろしいと観察して後悔が生ずること〕は、
　罪悪の果は怖ろしいと観察して後悔すべきです。それもまた、罪悪を造った者は、
１）　臨終に当たって怖ろしいのと、
２）　〔まさに〕死ぬとき怖ろしいのと、
３）　死んだあとに怖ろしいのと、
〔合計、〕三つです。
　そのうち、第一は、罪悪を持った者たちは、臨終のときにもまた、〔事切れるときの〕断末摩などの耐えがたい苦を経験します。すなわち、〔『入行論』（訳註４７）に〕「私が寝床にありながら、親族、友だちが周囲を囲んでいるが、殺生〔の果である苦の〕感受は私ただ一人が経験するでしょう。」と説かれています。
　それから死んだとき、果が怖ろしいことは、閻魔の使者〔である〕、なげなわを持った不吉な黒い者は、首から縛って、地獄の住処に率いていく。棍棒と剣など武器を持った者たちは、外から虐待する。多くの加害が生ずるのです。そのようにまた〔『入行論』（訳註48）に〕「閻魔の使者に捕らわれた者に、親族

は何の益が、親友は何の益ができるでしょうか。そのときただ一つ福徳が帰依〔処である〕なら、それにもまた私は依っていないのです。」と説かれています。『弟子書簡』(訳註 49) にもまた、「時のなげなわが首から掛けられていて、閻魔の凶暴な〔番〕人たちが棍棒をもって追い立てて、率いていくでしょう。」と説かれています。

閻魔の使者を私は怖れないというなら、すなわち〔『入行論』(訳註５０) に〕「人が〔頭や四肢の〕支分を絶たれるところ〔・死刑場〕に今日引かれていくことも怖い。口は渇くし眼そのものがかすむ※など、前〔の状態〕から他〔の状態〕に変わると見えるなら、閻魔の使者――すごく怖ろしく見る様子を持つものに捕らわれて、大きな怖れ、病に罹って、悲惨なことはもちろんです。」と説かれています。

死んだ後に罪業の果が怖ろしいことは、大〔有情〕地獄に転落して、煮られる・焼かれるなどの耐えがたい苦を経験するでしょう。よって、きわめて怖ろしいのです。すなわち、〔『親友書簡』訳注 51 に〕、「地獄を描いたのを見た者と聞いた者、念じた者、読んだ者と形にした者さえも、怖れを生ずることになるの〔です。それ〕なら、耐えられない異熟〔・果報〕を経験する者たちはもちろんです。」と説かれています。

そのように、罪悪の果それはきわめて怖ろしいので、後悔を生ずべきです。

罪悪を造ると
3 つの「死のとき」に、
苦しみに満ちた
とても怖い果となる・・。

断末摩：《「末摩」は、梵 marman の訛った音写。死節、要処などと訳する。体内のある部分をいい、命終にこれが分解して死に至るという》臨終のこと。
異熟：類や時を異にして行為の結果が熟すること。また、その結果。善または悪の行為が性質を異にした善でもなく悪でもない結果を生ずることをいう。(仏教語大辞典)

以下、第二の義〔：怖ろしいと観察して後悔が生ずること〕を表にまとめてみました。

	罪業の怖ろしい果	経証
1）　臨終のとき （死が近づくとき） at the approach of death	〔事切れるときの〕断末魔などの耐えがたい苦を経験する	『入行論』 「私が寝床にありながら、親族、友だちが周囲を囲んでいるが、殺生〔の果である苦の〕感受は私ただ一人が経験するでしょう。」
2）　死ぬとき While dying	閻魔の使者〔である〕、なげなわを持った不吉な黒い者は、首から縛って、地獄の住処に率いていく。棍棒と剣など武器を持った者たちは、外から虐待する。多くの加害が生ずるのです。 （閻魔の使者を私は怖れないというなら、）	『入行論』 「閻魔の使者に捕らわれた者に、親族は何の益が、親友は何の益ができるでしょうか。そのときただ一つ福徳が帰依〔処である〕なら、それにもまた私は依っていないのです。」 『弟子書簡』 「時のなげなわが首から掛けられていて、閻魔の凶暴な〔番〕人たちが棍棒をもって追い立てて、率いていくでしょう。」 『入行論』 「人が〔頭や四肢の〕支分を絶たれるところ〔・死刑場〕に今日引かれていくことも怖い。口は渇くし眼そのものがかすむ※など、前〔の状態〕から他〔の状態〕に変わると見えるなら、閻魔の使者――すごく怖ろしく見る様子を持つものに捕らわれて、大きな怖れ、病に罹って、悲惨なことはもちろんです。」
3）　死んだあと After death	大〔有情〕地獄に転落して、煮られる・焼かれるなどの耐えがたい苦を経験する。よって、きわめて怖ろしい。	『親友書簡』 「地獄を描いたのを見た者と聞いた者、念じた者、読んだ者と形にした者さえも、怖れを生ずることになるの〔です。それ〕なら、耐えられない異熟〔・果報〕を経験する者たちはもちろんです。」

懺悔を後回しにしていると、
罪を浄めずして死ぬことになる。
速く懺悔せよ。

速く離れることが必要であると観察して後悔が生ずること

第三〔：速く離れることが必要であると観察して後悔が生ずること〕を説明するなら、

罪悪それはまた、後のとき懺悔することが充分であると思うなら、充分ではないのです。速く懺悔することが必要です。それはなぜかというと、罪を浄めていない間に私は死ぬ〔という〕疑いがあるのです。そのようにまた、〔『入行論』(訳註52)に〕「私は罪を浄めていなくて前に死亡することになるでしょう。どのようにこれから解脱するのでしょうか。速い仕方によって救護してください。」と説かれています。

罪を浄めていなくて私は死なないと思うなら、死魔は私の罪悪を浄めるのと浄めないのとの考慮をせずに、何でも隙を見つけて命を奪うので、いつ死ぬかの決定は無いのです。そのようにまた〔『入行論』(訳註53)に〕「信用できないこの死王は、〔私が為すべきことを〕為したのと為していないのを待たなくて、病である者と病でない者すべてもまた、偶然の寿命を信用できない。」と説かれています。

よって、寿命について期待は無いのです。罪を浄めていなくて死ぬ疑いがあるので、速く浄化することが必要です。よって、その損失に至るから、後悔すべきです。

かつての罪人たちも、
能破現行の力によって、罪を浄めた。

そのように三つの理由により罪悪に後悔を生じて、殊勝な対境と大勢の面前において告白し、懺悔すべきです。そのように能破現行の力により罪を浄めることは、例えば、強い人への借金ができたのを返せないことを怖れて、お願いすることと似ている、と説かれています。

かつて悪人アングリマーラ（指鬘しまん）という九百九十九人の人を殺した極悪人もまた、対治現行の力を行持〔・実践〕したので、罪を浄めて阿羅漢の果を得たのです。そのようにまた〔『親友書簡』(訳註54)に、〕「かつて放逸であったのから、あとで不放逸になった者はまた、雲を離れた月のように美しい。ナンダ、アングリマーラ、ダルシン、ケーマカのように。」と説かれています。

指鬘：鬘＝かつら/みずら　インド風の装飾で、花を連ねて首やからだを飾る飾り。男女ともにつけた。「指鬘しまん：切った指で作った輪をかけている者」

〇参考資料：『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシュー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ訳註（ポタラカレッジ）P50、

（※（第〇章△△）は、『入菩薩行論』本文の「章と行」を示しています。）
後悔の力・・・・もろもろの方角にいらっしゃる仏・菩薩、偉大なる慈悲をもつ方に手を合わせて、犯した罪を後悔し、祈願します（第二章・27）。時間としては無始以来今日まで（第二章・28）、原因としては無明、主に三毒などの煩悩の原因によって（第二章・29）、対象としては犯した罪を、三宝や上師、両親に対して懺悔します。基盤としては自分の身・口・意によって、実体として、行いとして自分が犯したことや他者にやらせたこと、自他の罪なる行いを喜んだことなどについて懺悔します（第二章・28～31）。そして、懺悔の役割として、無常なる死はいつとも知れず訪れることにより、来世、輪廻や三悪趣に落ちること、罪が三善趣や解脱、仏の境地のさまたげであることを思い出し、以前、罪を犯したことを猛毒を飲んでしまったかのように後悔すべきです（第二章・31～37）。

・ナンダ、アングリマーラ、ダルシン、ケーマカ：（『解脱の宝飾』P326 訳註54）
この四人はかつて悪行を行った者として有名である。「親友書簡の注釈」に、「ナンダというのは、貪欲の大きな釈迦族の青年〔である、シャキーニ・ムニの従弟〕がいた。彼は自分の妻にきわめて執着したので、彼女がいなくては須臾（しゅゆ：ほんのしばらくの間）も喜びを経験しなかった。そのような彼は如来により家から出されて出家した。出家しても昼夜に彼女だけについて尋思したが、法についてはそうでなかった。そのような者に如来は阿羅漢を得させたことに関してである。
アングリマーラというのは、或るバラモンの子。彼は愚か者であった。すなわち彼は「法になる」という師の教えを聞いて、九百九十九人を殺した。彼も後で如来により出家して三界より離貪した。ダルシンはアジャータシャトル。彼は瞋恚をもった者。すなわち彼は不善の友（デーヴァダッタ）と出会った。そしてかつての怨恨に拘ったので、〔マガタ国の〕法に適った父王〔ビンビサーラ〕を殺した。彼も善知識・如来の教えにのみ依って地獄の火の薪より解脱した。良家の子で〔で給孤独長者の甥〕ケーマカも、非如理の作意によって他人の妻と交合しようとする錯誤により母を殺した。それから如来の教えにのみ依

った。糸玉を投げたように地獄の金剛から解脱した。天井世間の安楽を経験したと、知られている。」
という。

以下、参考まで。

・ナンダ（Wikipedia より）

釈迦仏が故郷カピラ城に帰国して 3 日目（2 日目とも）、難陀の王子即位式及び、新殿入初式、結婚式を行っていた。妻は国中で一番の美人とされる女性だったと伝えられるが、その妻との結婚式の最中に、釈迦仏が場内に入り祝歌を唱歌し彼に鉢を渡して立ち去った。難陀は仏の後を追って、ついにニグローダ樹苑にある精舎まで来てしまい剃髪させられて出家してしまったといわれる。

しかし出家して仏の教下によって修行するも、彼は妻のことをなかなか忘れられず悩んで、修行を止めて妻の元に帰らんと欲していた。彼の心中を悟った釈迦仏は、神通力の方便をもって、三十三天の帝釈天に随う 500 人の美しい天女を示し、釈迦族の女性とどちらが美しいかと難陀に問い、天女だと答えると、釈迦仏は 500 人の天女を得ることを保証し、難陀は修行を決意する。それから比丘たちの非難を受けて大いに恥じ入り、心を入れ替え証果を得たといわれる。

・アングリマーラ：（『チベット密教の瞑想法』ゲシュー・ソナム・ギャツツェン・ゴンタ　P112 より）

アングリマーラは最初、バラモン僧に師事していたが、たいへんな美男子であったために師匠の妻に好かれ、それに嫉妬した師匠がアングリマーラに、千人の人を殺してその指を集めて首飾りをつくることを命じる。真面目な修行者のアングルマーラは師匠の命令を信じて、それに従い、目標の千人まであと一人になったときに釈尊に出会って諭され、自分の間違いに気づく。そして、改心して、仏弟子となって修行に励み、ついに悟りを得て阿羅漢になった。

・ダルシン：タルゲン英語訳では、Ajatashatru アジャータシャトル（クーニカ・アジャータシャトル ）漢：阿闍世　（Wikipedia より）

アジャータシャトルは釈迦の生きた時代のマガダ王として、父ビンビサーラとともに初期仏教に深く関わった人物である。ある仏典に説かれる所によれば、父ビンビサーラは老いて子なきを憂い神に祈った。時にある一祖師から、毘富羅山（ヴィプラ）に住する仙人が近々死んで托生することを告げられ、ビンビサーラ王はこれを待ちきれず殺したところ、間もなく夫人が懐妊した。これ生まれざる前に、すでに怨みを懐く意味で**未生怨**といった。然るに生まれるにあたり相師に占わせると、生兒が怨を懐き父王を害すだろう、と告げたので、ビンビサーラ王はこれを信じるようになり、楼上から我が子を投げ捨てた（もしくは高い楼閣を造り、そこから産み落とさせたとも）が、一指を折ったのみで死ななかった。これ故に阿闍世を婆羅留支（バラルシー＝折指）とも称した。（中略）

その後、成長したアジャータシャトルは、釈迦仏に反逆し新教団を形成せんとしていた提婆達多（デーヴァダッタ）に唆され、その言を入れてビンビサーラを幽閉した。また母が身体に蜜を塗って王に施していた事を知るや母も幽閉せしめ、ついに父王は餓死し命終してしまった。しかし、その後アジャータシャトルはその罪を悔い、激しい頭痛を感ずるようになった。そして医者である耆婆（ジーヴァカ）大臣の勧めにより、釈迦に相談した所頭痛がおさまったため、仏教に帰依し教団を支援するようになったと伝えられている。釈尊が入滅後、王舎城に舎利塔を建立して供養し、四憐を服して中インドの盟主となり、仏滅後の第一仏典結集には、大檀越としてこれを外護（げご）したといわれる。

・ケーマカ　：（テーラワーダ仏教教会 HP より）

アナータピンディカ居士の甥のケーマカは評判の美男子でした。その人が視界に入っただけで、女性たちはメロメロになって、礼儀作法も忘れて、頭が性欲に支配されてしまいました。この男も、そんな状況が決して嫌ではなかったのです。隙を見て、美女たちの要求に応じたのです。彼の人生は、人妻たちと不倫することに大忙しでした。しかしこの不倫の罪は、当時のインドでは斬首にもなりかねない重罪でした。ある日、ケーマカは王の代官に逮捕されて、王のところへ連行されました。アナータピンディカ居士はお釈迦さまの第一の在家信者であったので、国王も彼のことをたいへん尊敬していました。ケーマカを処罰することで、尊敬に値するアナータピンディカ居士の名誉が傷つくと思った国王は、彼を釈放しました。不起訴処分で釈放されたものの、ケーマカさんは自分の女癖の悪さをなかなか改められなかったのです。彼は、同じ不倫の罪で逮捕されて、また恩赦を受けて釈放される、ということを二度も三度も繰り返しました。そうなると当然、王の裁きの公平性について、国民の間で疑問の声が高まります。アナータピンディカ居士の身内だけが特別扱いされているという非難が起こって、当のアナータピンディカ居士の立場も微妙なものになってしまったのです。

この問題を何としてでも解決したいと思ったアナータピンディカ居士が、強引に甥を連れて祇園精舎にお釈迦さまを訪ねました。居士は状況をお釈迦さまに説明し、「尊師、この男に説法なさってください」と頼みました。お釈迦さまは彼に、邪淫の罪について説法なさったのです。

（中略）

色男のケーマカにお釈迦様が何を説かれたのでしょうかと考えてみましょう。放逸で（性的妄想に耽り）邪淫を犯す人は四つの不幸に陥ります。

一、不善行為をします。

二、夜安らかに眠れない。

三、非難を受ける。

四、地獄に堕ちる。

地獄絵図ほど、お釈迦さまはケーマカを脅してないみたいです。社会的、現実的問題を語られているのです。次にその行為の報いについて語られているのです。不善行為をする人は、悪の道を歩む人になる。怯え震えながら、緊張しながら、性行為をするはめになる。それから得る喜びも取るに足らない僅かなものである。政府によって重い罰を課せられる。ですから、人は邪淫を戒めるべきです。ケーマカは預流果の覚りに達しました。その日から、生活を改めたのです。